

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

『一枚の壁が僕に教えてくれたこと』

埼玉県

筑波大学附属坂戸高等学校

一年 小田島 誠慈

一枚の壁が僕に教えてくれたこと

筑波大学附属坂戸高等学校 一年
小田島 誠慈 (おだしま せいじ)

僕の第二のふるさととは、ドイツ北西部にあるデュッセルドルフという街だ。僕は、生まれて間もない頃から今年の三月まで、ずっとドイツで暮らしていた。デュッセルドルフには、いろいろな国にルーツを持っている人たちが暮らしている。肌や目、髪や顔の形もさまざま、街を歩いていると実に多くの言語が聞こえてくる。

その街のある公園に、コンクリートで作られた一枚の壁がひっそりと立っている。あの有名なベルリンの壁の一枚だ。公園のあちこちで家族がたわむれている。ボールで遊んでいる子供たち。日光浴をしている人たち。緑でいっぱい公園には明るさが満ちているのに、その壁の周りには誰もいなくて、寂しい感じがした。

そばに行ってみて触ってみた。少しひんやりしていた。壁の片側には絵が描かれている。しかし、絵の両端が切れていて、絵の全体像は分からない。表面はツルツルとまではいかないが、滑らかだ。反対側には絵はなかった。ザラザラしていて、穴や傷が多く、どこぼこしている。どれくらいの大きさなのか測ってみた。高さは三メートル六十センチ、幅は一メートル十五センチ、厚みは真ん中のあたりで十八センチ、一番下は二十一センチ、上は、僕が精一杯手を伸ばして届いたところで十六センチだった。

「思ったよりも厚くない。でも、これが何十年の間、人々を隔てていたのか。」
ベルリンの壁が壊される前には、この壁の一番上に大きな筒状の物が被さっていて、人が乗り越えられないようにされていたことが、ネットで調べて分かった。そして、この壁が、全長百五十五キロにもわたって連なり、西ベルリンの外周を囲っていたことを知って、僕は驚愕した。

「この壁は、目の前で人が亡くなるところを何度も見てきたのかもしれない。絵が描かれているほうが滑らかなのは、壁を越えようとする人たちが登れないようにするためだったのではないだろうか。今触れているこの壁に、どれだけの人が手を触れ、足を掛け、『この壁を越えられたら』と思っただろうか。」
そう思うと、壁に触れることに少し抵抗を感じた。

ベルリンの壁は一夜にして築かれたという。決して越えられない境界線が、多くの家族と友人たちを引き離れた。信じがたい出来事だ。しかし考えてみれば、実際にコンクリートの壁を築かなくても、人は心の中で瞬時に境界線を引いてしまうのではないかと思う。

僕も小さい頃、「なんでドイツ人は！」などと行って、両親から「そんな言い方をしてはいけないよ。ドイツにも日本にもいろいろな人が暮らしているんだから、『ドイツ人はこうだ』とか『日本だったら違うのに!』とか、そういう言い方をしてはいけないよ」と注意された。だから、今も心の中で線を引きそうになると、両親の言葉を思い出す。

人は、いろいろな種類の壁を作ってしまう。嫌だからとか苦手だからとか、あるいは敵意のせいで作られる壁だけではなく、純粹に自分や仲間を守りたいという思いで作られる壁もある。でも、もちろん壁を作らなくて済むのなら、そうしたい。どうすればいいのだろう。

僕はよく考える時に、愛用の国語辞典を引く。その中に、何か答えにつながるものがあるかもしれないと思うからだ。ふと、父が口にしていた「共生」という言葉を思い出して、引いてみた。そこには、こう書かれていた。

「生あるものは、互いにその存在を認め合って、ともに生きるべきこと。」*
素敵な表現だと思った。

「みんなが、『互いにその存在を認め合って、ともに生きる』ことができれば、どんなに素敵だろう。そくだ、壁を作るエネルギーを、共生の道作りに使えないだろうか。そのために、僕には何ができるだろう。」

僕は将来、漫画家になりたい。でも、「漫画家になること」が夢ではない。たくさんの人に「漫画で希望を届けること」が僕の夢だ。

今、ひどい戦争で苦しみ、悲しんでいる人たちがたくさんいる。平和だと思っていた今の時代に、平和がないことに絶望している人たちがいる。だから、「互いにその存在を認め合って」なんて、軽々しくは言えない。でもだからこそ、僕は、人が希望を持つことを忘れないような漫画を描きたい。

今、僕はセリフのない漫画を描くことに挑戦している。それは、「言葉や文化を越え、一緒に笑える瞬間を作り出せないだろうか」という思いからだ。この先どんなことが起こるかなんて誰にもわからない。しかしだからこそ、世界中の人たちが互いに思いやり、希望を語り合う場を、僕は作っていきたい。

「生あるものは、互いにその存在を認め合って、ともに生きるべきこと。」
多種多様な人々が行き交う街デュッセルドルフ。僕の第二のふるさとにある一枚の壁は、実際には何も語らなかつたけれど、僕にこの言葉の尊さと難しさを教えてくれた。その静かな問いかけに、僕は今日も思いを巡らす。

* 『新明解国語辞典 第八版』（山田忠雄他編、三省堂、二〇二〇年）